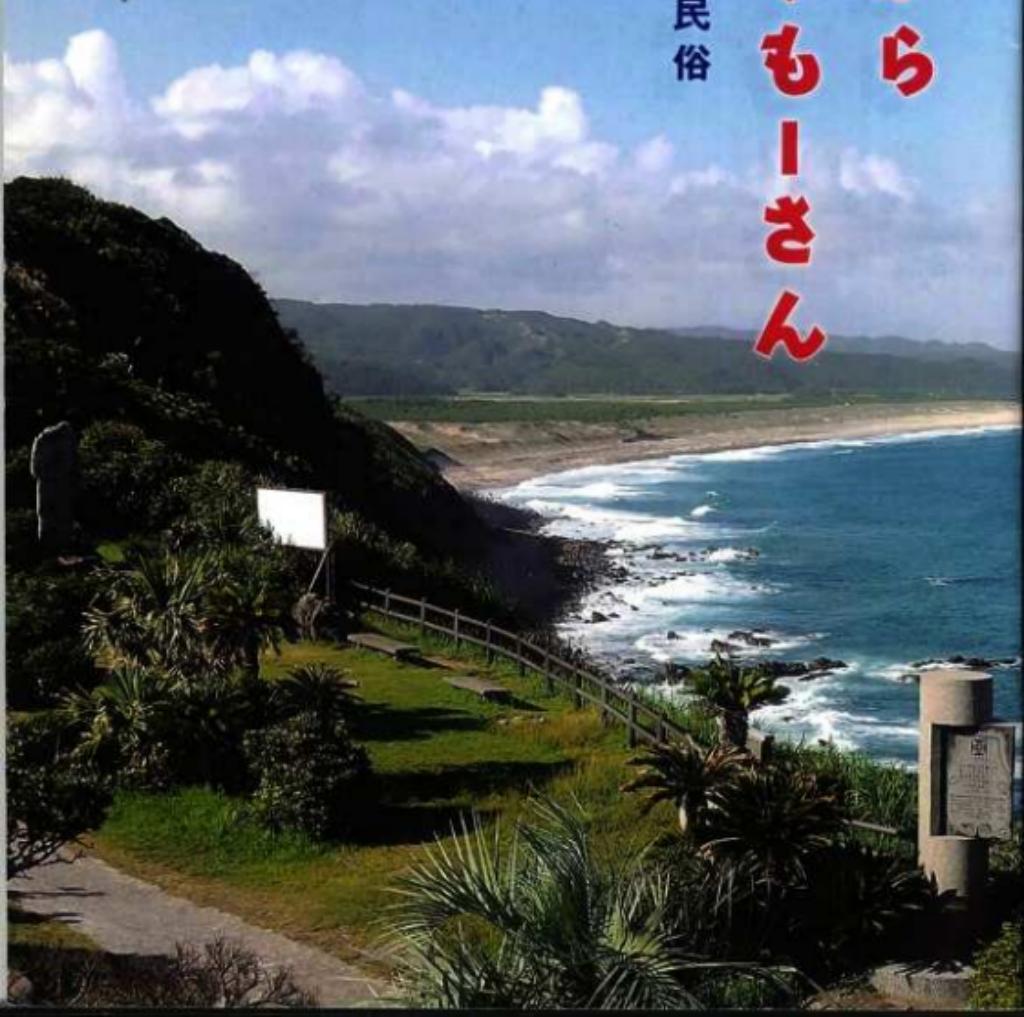


# 種子島から めつかりもーさん

種子島の歴史と民俗

長浜市長浜城歴史博物館  
NAGAHAMA CASTLE HISTORICAL MUSEUM



# 種子島から めつかりもーさん

種子島の歴史と民俗

長浜市長浜城歴史博物館  
NAGAHAMA CASTLE HISTORICAL MUSEUM



## 発刊にあたつて

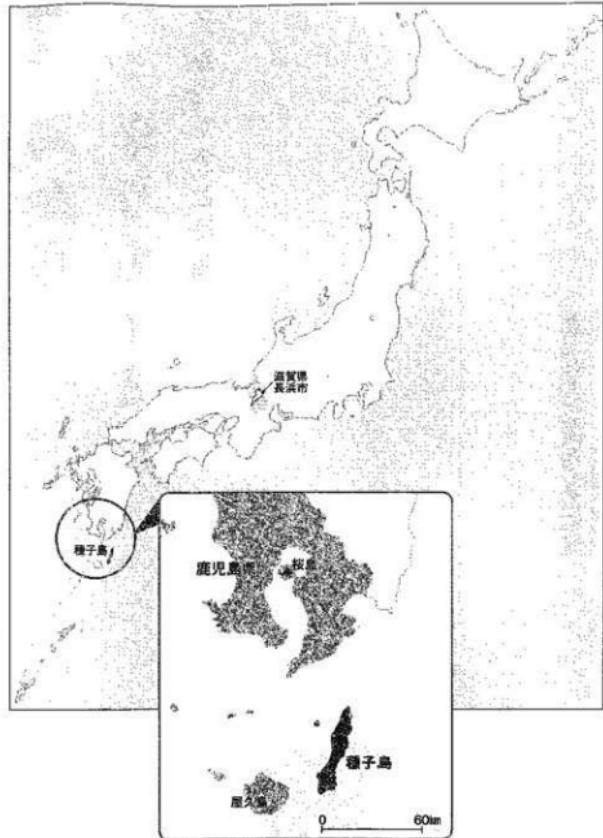
田上美子さん執筆による「種子島からめっかりもーさん」は、長浜城歴史博物館「友の会だより」に連載されました。内容は、単なる種子島の紹介という範疇を超えて、島の民俗誌というべきものでした。私自身の専門と重なりあることも多く、大変興味深く拝読させていただきました。記憶に残るのは「島」は、種々の文化の流入によって形成されているという彼女の持論でした。

確かに私たちは「島」を一つの文化エリアに区切って見がちです。それはあたかも島 자체が純粋培養されたかの錯覚を抱かせることにつながります。田上さんの連載は、そういった見方に警鐘を乱打したるものと私自身は思っています。

どうか田上さんには、「これからも『島にあって島を外から見る目』を存分に發揮していただきたいと思います。それが一年間の研修の成果だと思うからです。

最後に「あの人は頑張らすっちゃん」という漢望と尊敬をこめて佐世保弁を送らせていただきます。「また違う日まで」。どうか元気で頑張つてください。

平成二十二年三月



## 目次

発刊にあたって

### I 種子島からめつかりもーさん

種子島の歴史と民俗

1 種子島って?	8
2 米のチカラ	10
3 廣島田食—「曰」—一番近い島・種子島—	12
4 八月の種子島	14
5 山の井様と松寿院	16
6 さつまいも(甘藷)にまつわるお話	18
7 芸能の島と願成就	20
8 来年もよい年でありますよつ	22
9 春を呼ぶ種子島の年中行事	24

### II 「種子島からめつかりもーさん」に寄せて

種子島と長浜・国友と

種子島からタクワ(そして)国友	32
種子島の民話と刀鍛冶	36
種子島への鉄砲伝来と国友鍛冶	40
関西人の種子島感	44
南島文化と民俗学	46

## 編集後記

〔凡例〕

一、本書は、長浜城歴史博物館友の会「友の会だより」（一五号（平成二十二年五月一日発刊）から、「友の会だより」（一五号（平成二十二年三月一日発刊）に掲載した田上美子執筆の「種子島からめつかりもーさん」を編集し直し）、一冊にまとめたものである。

一、あわせて、同館学芸員が「種子島からめつかりもーさん」に寄せ、長浜と種子島の歴史的関係等について書き下ろした論説を掲載した。

一、「めつかりもーさん」とは、種子島の方言「こんにちは」の意味である。

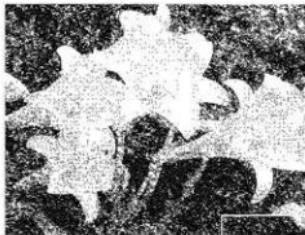
一、第一部の著者の田上美子は、滋賀県長浜市と鹿児島県西之表市（種子島）の友好都市提携に基づき、平成二十二年度、西之表市から長浜市（長浜城歴史博物館）に人事交流派遣職員として在職していた。本書はお互いの地域の歴史・民俗を知ることで、両市の友好関係が、さらなる発展することを祈念し、企画・編集したものである。

# I 種子島からめつかりもーさん

## 種子島の歴史と民俗



# 種子島つて？



ティボウユリ（西之表市の花）



ハイビスカス（西之表市の花木）



湊田海水浴場

私のふるさと種子島は、鹿児島市から南へ約一一五キロメートル、北緯三〇度東經一三〇度に位置した細長く平たい島です。島の面積は四四七・三六平方キロメートル。日本では五番目に大きい島で、お隣に世界遺産で有名な屋久島があります。種子島は一市二町（西之表市・中種子町・南種子町）で構成されています。人口は平成二十一年二月末で西之表市一万七五四二人、種子島全体では三万三・四六人という小さな島です。気候は温暖ではありますが、年間を通して北西の風が非常に強いため船が欠航することも多く、島民の生活に影響を及ぼすこともしばしばです。

種子島の観光の目玉といえばやはり鉄砲とロケット発射場でしょうか。

西之表市には種子島開発総合センター（愛称・鉄砲館）があります。南蛮船を模したユニークな建物で、ボルトガル初伝統、国産第一号銃といわれる伝八板金兵衛鑄定作火薬銃をはじめ、国内外の古式銃砲約一〇〇丁など鉄砲資料のほか、自然、

歴史、民俗資料も多く展示しています。

ロケット発射場は種子島の南の南種子町にあり、打ち上げ間近になると技術者や報道関係、観光客で島はにぎわいます。天候により延期になることもあります。天候により延期になると空にオレンジ色の光が筋をなし、数秒後ゴーという地響きのような音が響き渡ります。

鉄砲伝来の伝播を契機とし、長浜市とは昭和六十二年（一九八七）十月八日に友好都市協約を締結しました。現在まで教育・文化などの交流を行い、特に毎年長浜出世まつりと種子島鉄砲祭りにはお互いの鉄砲隊が参加し、その地に銃声を轟かせています。今年三月には長浜市少年少女合唱団「輝らりキッズ」が西之表市を訪れ、介護施設で慰問活動を行ったそうです。これからも様々な文化交流が続くことを期待します。

## 2 米のチカラ

今月は「米」のことについてお話をしたいと思います。

種子島では二月から穂まきが始まり、三月末までに田植えは終了します。こちらより約二ヶ月早いでしょうか。雨期を迎えると穗を伸ばし、黄色く色づく七月月中旬から下旬にかけて稲刈りは終わり、八月上旬には新米を味わうことができます。しかし、種子島はこの時期台風に見舞われるため、台風発生に戦々恐々とした気持ちで日々を過ごします。

### 赤米のこと

種子島の南にある南種子町では、七月の中旬には日本一の早場米として全国各地に出荷される様子が毎年報道されます。さてこの南種子町茎水には玉満神社という神社があり、この御田には「赤米」という神米が現在でも栽培されています。大きさは白米よりも少し小さめ、表面は赤褐色、実は薄赤で、炊くと赤飯のような色になります。粘



王依姫の舞



苗をもった社人が田植歌に合わせて舞う

(写真転載:HP ふるさと種子島 <http://www.furusato-tanegashima.net/> より)

た模様です。このお田植え祭りは県の無形文化財に指定されています。校区民はお田植え祭り前日、奉納の旗立てや苗代たて、御田の森の手入れなどを行います。そして当日早朝、森に供物を供え、神事の用意をします。その後ホイントン(神主)がお咲を祓い、森で玉串奉斎を行います。その後、氏子や子供たちが田植歌にあわせ、赤米のお田植え開始です。この田植えは「人禁制」です。田植え終了後、「玉依姫の舞」「馬耕舞」「田植舞」「玉依姫への祈願舞」といったお田植舞の奉納が行われます。舟田で社人が笛を持ち田植え歌に合わせて舞います。一連のお田植舞が終わると、赤米の握り飯や煮しめなどで歓会をおこないます。

御田の森の近くには「赤米館」という施設があり、赤米に関する資料を展示しています。ちなみにこの校区には種子島宇宙センターがあります。昔からの伝承を地域住民の手で継承しながら、科学技術の最先端の施設もあるといふ地域なのです。

五月の節句には「つのまき」というもち米のダ魔をはらうダ」

ゴ(団子)を作ります。ダチク(学名:ダンチク)



つのまき ダチクの葉で2つの「つの」をつくる

の葉を二枚重ね、三角をつくりそこに灰汁(あく)つけたもち米を入れ、上手に三角に巻きそれを煮るのです。出来上がったら砂糖にまぶし食べます。園子に「つの」を作り慶よけとし、それを食することで子供たちの健やかな成長を祈る意味があると考えられます。種子島では、ハレの日にはよく餅や餅を作ります。やはり米のチカラを信じ、米にチカラを授けられる」とを期待するのででしょう。

こちらの近江米はとても美味であると聞きます。春が訪れ、山から降りてきた雪解け水で育った近江米と、南国(みなみ)の削す(くずす)ような日差しで育った種子島米をせひ食べ比べてみたいと思っています。

# 皆既日食——「月に一番近い島」・種子島

## 天文ショー皆既日食

既日食が観測できます。皆既日食が始まると、あたりは夜のよう暗くなるそうです。

みなさんは、今年七月、日本で皆既日食が観測できるのを存知でしょうか。日食とは、月が太陽の前を横切ると、太陽を隠す現象です。平成二十一年（二〇〇九）七月二十二日、日本では種子島南部（種子島宇宙センター以南を北限、奄美大島北部を南限とした地域で皆既日食が観測できます。国内で観測できるのは四六年ぶり、次回観測できるのは二六年後であり、さらに今年の皆既日食は、観測できる地域の幅が大きいことから、「今世紀最大の天文ショー」との呼び声が高く、注目が集まっています。

種子島では、天文十二年（一五四三）

ボルトガル人が漂着した門倉岬において午前一〇時五〇分ごろから約二分間、種子島宇宙センターでは約一分間、皆既日食のブレイブントとしてさまざまな催しが開催されています。種子島宇宙センターでは星空観察会が行われ、高倍率の望遠鏡で土星や木星、国際宇宙ステーションを観測したことが報告されています。また種子島開発総合センター（鉄砲館）で

は、六月二十六日から八月一日まで種子島宇宙センターと鹿児島県立博物館の協力を得て、企画展「皆既日食」がやつてくることを開催します。鉄砲館によると、種子島は三年後の二〇一二年五月二十一日、金冠日食が見えるとのことです。連続して同じ地域で日食が見られるのは非常にめずらしいということです。

今回西之表市では、部分日食しか観測できないのですが（それでも九九%が欠けて太陽が糸のように見えるそうです）、この皆既日食を種子島のサーフィンやスキューーパー等のマリンレジャーと組み合わせて、「今年の夏は種子島」としてPRしています。あとは、七月二十二日、台風到来を免れ、晴天に恵まれることを切に祈るばかりです。

今年は世界天文年。門倉岬に漂着したボルトガル人は種子島に鉄砲を云々、国友で生産された火薬統、その国友の鉄砲鍛冶の家に生まれ、反射望遠鏡を自作して江戸時代の科学技術発展に貢献した国友一貫産。現代の科学技術の最先端である種子島宇宙センターで観測できる皆既日食。ただの偶然なのか必然なのか、何か不思議な縁を感じるのは、私だけでしょうか。



種子島観光協会ホスター

# 八月の種子島

精霊様が帰省するお盆

さて今回は、種子島（西之表市）の盆行事をご紹介したいと思います。

市街地周辺の地域では、十四日の夜明け前、提灯を下げて精霊様を墓へ迎えに行きます。提灯の灯りで精霊様を先導し、家へ迎えます。他の地域では墓へ迎えに行かず、家の入り口に提灯を下げ、待つところもあります。私の家では、十三日の夕方、墓へ精霊様を迎えて行きます。墓に参り、松の薪で「迎え火」を焚きます。そのおきを持ち、再度家の入り口で「迎え火」を焚き、精霊様をお迎えします。

精霊様への供物は、煮しめやそうめん・ごろごろ・果物・漬物・さつまいも・黒砂糖・落花生などで、三度の食事を供えます。ある地域では、自分のご先祖様への供物とは他に、焼る家のない精霊をホカジョウヨウと呼び、ホカジョウヨウのため、自分の家の精霊様と同じお膳と第三膳を行

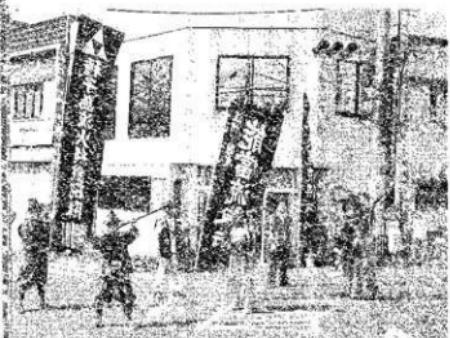
き、またそこで「送り火」を焚き、精霊様を無事に送り届けるのです。帰りにはお土産にナガマキを供えます。

墓地には、「迎え火」や「送り火」を焚き、帰省した親戚たちが集まり、久しぶりに再会します。蟬の声の中、「迎え火」「送り火」の松の煙のにおいが、私にとってはお盆の風景です。

種子島は移民を多く受け入れている島で、度重なる飢饉や災害によって、種子島に耕作の地と生活の糧を求めて、鹿児島から多くの人が移り住みました。現在では西之表市の集落の約三分の一が移住集落です。そのため盆行事のない集落もありますし、移住してきた人たちと種子島の風習が混ざって今日の形になった盆行事もあると思われます。また、生活スタイルの変化によって、昔ながらの方法はなくなり、盆行事が簡略化されつつあるのも、残念ながら事実です。

## 夏の一大イベント種子島鉄砲まつり

種子島の八月といえば、毎年、種子島鉄砲まつりが開催されます。両立て行列や踊り連、友好都市である長浜市の国友鉄砲研究会や大阪府堺市火縄



毎年恒例「種子島鉄砲まつり」

鉄保存会、本市の種子島火砲隊の演舞が披露されます。三つの鉄砲隊が行う演舞はいつ見ても、ものすごい迫力です。火砲隊の銃声は耳だけではなく、体全体に重く響く迫力の轟音です。夜は花火大会が盛大に開催され、西之表市の夏の一大イベントになっています。機会があれば、ぜひご参加ください。



世界一美しいといわれる「種子島宇宙センター」  
夏休みには、大勢の帰省客や観光客が訪れる  
(写真転載: HPふるさと種子島  
<http://www.furusato-tanegashima.net/> より)

# 5 山の井様と松寿院

## 生き人形・山の井様

種子島開発総合センター（通称・鉄砲館）には、「山の井様」と呼ばれる人形が展示されています。

これは種子島家に代々伝わるもので、江戸時代、島津家が徳川家から賜り、その後、薩摩藩主・島津齊宣二女の於歸<sup>おとづれ</sup>後の松寿院<sup>まつじゅいん</sup>が第二十三代島主・種子島久道<sup>くとう</sup>に與入れ際、伝わったといわれているもので、市の指定文化財です。



山の井様  
(種子島時邦氏所蔵)

かつてしまふため、松寿院は家臣に命じ薩摩へ治水の研究に赴かせ、工事を行っています。安政四年（一八五七）一月から春の農繁期を除き十月まで、役夫約一万二〇〇名、手許金<sup>てしょきん</sup>を費やし、治水工事を完了させています。

塩田開発については、製塩の技術改良のため、鹿児島本土より技術者を招き、苦心の末、文久元年（一八六一）冬、約三町八反の大塩田を完成させ、島内の自給はもちろん、屋久島の分も賄えていたようです。

種子島の海岸は、单调で屈曲が少なく季節風も強いため、種子島沖で難破する船が多く、港湾修築は島主代々の悲願であったようだ。島の財政が安定したころ、松寿院は港湾修築の決意をし、薩摩藩の支援を取り付けるべくその願いを申し出ています。

薩摩藩からの調査團を厚くもて、薩摩藩より年間三〇〇両なし、薩摩藩より年間三〇〇両四年前の援助を許可されました。船七二〇〇艘、人夫二万人以上、



松寿院  
(種子島時邦氏所蔵)

ひどいことから、冬に内掛け羽織らせてることしかできないとのことです。種子島家の鹿児島屋敷では婦人の部屋に奥隠れ、春になると磯の命に負って逃げ出し、戦時中には、戦火を嫌って背負って避難させていたといいます。将軍家から賜った人形を、大切に人間と同じように扱っていたことから、人形に魂があり、生き人形になつたかもしれません。

## 女殿様・松寿院

さて、この山の井様を島津家から種子島家へと伝えたのは、先に述べたように薩摩藩主・島津家から種子島家に與入れられたが故で、NHKの大河ドラマで有名になった姫姫の伯母にあたる方です。久道死後、松寿院と名乗り、種子島の政治を取り仕切る「女殿様」となりました。松寿院は種子島の島民のため数々の事業に取り組み、特に大規模なものとして、大浦川の川直し、平山塙田の開発、西之表港湾の防波堤修築があります。

大浦川の下流は、満潮時には田畑が海水に浸

費用も一二〇〇両以上、約四年を費やし、文久二年（一八六二）七月悲願であった港湾修築工事が完了しています。石を積んで作られた波止（防波堤）は、度重なる台風にも、破損することなく現存しています。このほかに製糖の許可や種子島墓地の整備、大飢饉時の手許金の提出と不作の際の免租など、松寿院は、まさに島民の命と財産を守る施政者であったと思います。余談ですが、英語色を好む者はこのことか、松寿院は自分の藝を抱ぐなどした地元の男性を氣に入ると、田畠を与えることもあったようです。特に体の大きき筋骨隆々の男性を好みだそうですね。現在でも「この土地は松寿院様から賜つたもの」という伝承が残っています。大きな事業を行つたのも間わず、このように話す松寿院は、きっと謙虚な人柄であったに違いありません。逆に、このような人柄だったからこそ、島津家や家臣、そして島民に慕われ、様々な事業を成し遂げることができたのだと思思います。

# さつまいも（甘藷）にまつわるお話

秋の味覚イチオシ「安納いも」

いいよ。食欲の秋、収穫の秋に突入しますが、皆さんは「安納いも」（品種名「安納紅」）というさつまいもを存知ですか。種子島の安納地区等で栽培されていた在来イモの中から育成されたイモで、最近新鮮にテレビなどで紹介され、注目されています。この安納いも、どうして人気が出ているかというと、一般的に焼きいもはホクホクした食感ですが、この安納いもはしつとりとやわらかく、オレンジ色で非常に甘みがあります。収穫後しばらく寒風にさらすと、安納いもの甘みがさらに引き出されます。この甘みを満載して、青果用として、あるいは焼きいもに加工し、冷凍焼きいもとして消費者の皆さんへお届けしています。

現在、安納いもの焼きいもは種子島一押しの特産品で、種子島の地域資源として自治体・農家一体となってブランド化を目指しています。消費者が届けています。

種栽培初地之碑と曰ふ。初め柄林公、治を園るや、志清民に在り。嘗て琉人より甘藷の話を聞き、折衝して之を求む。元禄十一年戊寅三月、中山王尚貞、一龍を贈る」とあり、我が国初の甘藷栽培の功績を称えています。「種子島鳥家譜」及び「大日本農史（農商務省農務局編集）」を基に記されたものです。

元禄十一年（一六九八）、第十九代島主種子島久基（暁年の号「柄林」）は、飢饉の際の食料として琉球より甘藷を譲り受け、甘藷栽培を家老の村橋右衛門時乗に命じ、時乗は下寺寺の大漬休左衛門に甘藷栽培を命じます。初めてのことと、どのように栽培したらよいかわからない休左衛門、つるに実がなると思いつながら栽培しましたが、いつまでたっても実がならないため、怒って畑一面に広がつたつると葉を引き抜いたところ、土の中からさつまいもが出てきて、大喜びをしたといふ話が残っています。大漬休左衛門の墓に供えるそうです。第

の期待を裏切らない「ほかほかおいしい安納いも」の提供に努めていますので、機会があれば、ぜひ食べてみてください。安納いもを中心とした青果食べてみてください。安納いもを中心とした青果用さつまいもは、急速に作付面積を増やしており、その他にも葉子類に使用される紫色があざやかな種子島ゴーレド、焼酎の原料となるコガネセンガン、デンブン用のシロサツマなど、西之表市では一三種のさつまいもが栽培され、さつまいもはサトウキビと共に西之表市の主幹作物のひとつなのです。

## さつまいも栽培の成功

種子島・西之表市の市街地から車で一〇分ほど走った西海岸・国道五八号線沿いに「日本甘藷栽培初地之碑」が建っています。碑には「一本邦甘藷の栽培は実に我が種子島に創まり、種子島は我が下石寺を以つて試作の地と為す。故に題して日本甘

二十三代島主久道正室松寿院は、甘藷栽培を成功させた久基の功績を称え、「一六三三年「柄林神社」を建立しました。神社の隣は「御拝塔」とよばれる種子島家代々の墓地や、「大的初式」（県指定文化財）が行われる丹場があり、柄林神社は地元の人たちに身近な神社です。

## 万能作物さつまいも

冒頭でせい「安納いも」をご紹介しましたが、辛口党には芋焼酎がお勧めです。種子島には四社の蔵元があり、一二種類の銘柄があります。種子島産のさつまいもを使用しており、イモのにおいの強いものから飲みやすいものまで、好みに応じた多くの銘柄があります。

さつまいもは、食べてよ、飲んでよしの、万

種子島・西之表市でつくられる本格芋焼酎 勇そろい



芸能の島と願成就

種子島のあちらこちらでは、十月から十一月にかけて、集落の神社で秋祭りである「駿成祭

（がんじょうじ・がんじょうじゅ）が行われます。春にその年の豊作と豊漁・家内安全の願をかけ、秋にその願が成就したことを持様に感謝する行事です。その日は、集落に繼承される芸能や相撲が奉納されます。

種子島は「民俗芸能の宝庫」といわれ、たくさん の芸能が伝承されています。日本書紀に「多福島の人等を飛鳥寺の西の川辺に斬りき、種々の楽を奏し き」とあることから、種子島の人たちがかなり古 時代から、笛や太鼓で歌と踊りを奏で芸能を楽し ていたことがわかります。また市内の櫻文後期の遺 墓から、笛や太鼓の骨組みが出土しています。

西之表市には一〇の県・市指定文化財とその他  
多數の民俗芸能が残っており、市では無形民俗文  
化財保存連絡協議会において、保存と伝承に取り  
組んでいます。

獺子舞（鹿児島県指定無形民俗文化財）  
古田という地域に伝わる芸能で、鹿児島神社の願成就で奉納されます。明治時代、シイタケ栽培の盛んため大分県から古田に移住した人が伝え、今日までついています。大太鼓・小太鼓・櫻笛が輪番で立

食べ物を持ち寄り、歌や踊り・相撲を楽しむといった娯楽としての意味合いが強い日もあるのです。

て中、獅子と天狗が戦いを繰り返し、最後は獅子が力尽きるという流れです。その脇で、子ども扱する獅子方・天狗方の小僧が、道化を演じ観客の笑いを誘います。この獅子に噛まれると、子どもの無病息災のご利益があるといわれることから、舞の後、獅子に子どもの健康を願う親子の行列ができるのです。獅子舞の前には、棒と鎌を激しく叩き合つ棒踊りが奉納されます。

これが奈良ではこの日、各家々で自然薯と米粉を焼った色とりどりの「かるかん」が作られ、交換したり他の地域から来た人々に歓迎の意味を込めて振る舞います。願成就という日は、神に五穀豊饒を祈り感謝する日であると共に、村人にとって、酒と

兵児踊り 太鼓と柏子木の音から  
「トンキヤッキヤー」ともいう

安納柳踊り 柳と蝶で激しくたたき合いテンポが速い

ヨンシー踊り 沖縄から伝わった芸能で、それぞれが道具を持ち御殿を作り上げる様子を歌と踊りで表現している

その維持管理といった経済的な問題もありますが、種子島スローライフの中で、種子島らしい優雅でおらか、かつ勇壮な芸能民俗が伝承され続けることを切に願い、願うだけではなく民俗芸能の継承と保存のため、今何ができるかを考える時期であることを強く感じます。

種子島大通り

卷二

現和武部という地域に伝わる芸能で、風本神社の願成就で奉納されます。種子島家は頻繁に京都や大阪と直接往来しており、室町時代、島主が京都に行ったと花のついた被り物と色とりどりの

き関西地方の踊りを家臣に習わせ島に伝え、島の文化と融合しながら今日の形になったといわれます。鎧<sup>よろい</sup>と太鼓をもつた踊り手が内外で円になり、色とりどりの着物と飾りを身につけ舞っていきます。

**獅子舞（鹿児島県指定無形民俗文化財）**

残していくべき民俗芸能  
ほかに、兵児踊り・なぎなた踊り・面踊り・棒踊り・ヨンシー踊りなど、さまざまな形態の芸能が伝承されています。これらの芸能も日本全国から移住した人たちがその地域に伝え、地域の文化と融合してその地域の芸能として根付いています。

これらの芸能は、村の盛り上がりだけでなく地域の大  
きな行事にも披露されます。平成二十年に行われた  
市制施行五十周年記念事業では芸能大会が開催され  
多くの市民がおおらかで優雅、力強く勇社な芸能を

堪能しました。扱い手不足、諸道

其の維持管理といった経済的な問題もありますが、種子島スローライフの中、種子島らしい優雅でおらか、かつ勇壮な芸能民俗が伝承され続けることを切に願い、頼うだけでなく民俗芸能の継承と保存のため、今何ができるかを考える時期であることを強く感じます。

# 来年もよい年でありますように

トシトイドンが来るぞ!!

年も押し迫った12月31日夕刻、西之表市国上野木の平のある家に、雨(う)を叩いたり奇声を上げながら、騒々しくトシトイドン(トシドン)がやつて来ます。手には刀を持ち、恐ろしい形相のメンツの皮を身につけたトシトイドンは、子どもの名を呼び、「今年一年おりこうにしてつかー!」「父ちゃんの言う事を聞いていかー!」などと子どもたちに説教を始めます。また、家族を付けたトシトイドンの説教を聞く子どもの面に墨の墨みのをつけたトシトイドン

正座でトシトイドンの説教を聞く子どもたちと、真っ赤の腰巻きのをつけたトシトイドン

拂り腰、子どもに年餅を背負わせる

んざん舟かして船り際には、お年玉として丸い年餅を置いて帰っていくという一連の流れは来訪神、つまり神様なのです。

## 種子島家の注連縄と門松

上の写真は、元旦、開船前の種子島開発総合センター(通称・鉄砲船)に飾られた島主種子島家に伝わる「鶴の恩(こもり)」といわれる独特の注連縄です。ウラジロ・ダイダイ・ユズリハを付けた注連縄の下に、茅で編んだ蘆を結びつけ、中には丸い餅が入っています。「鶴の恩」の上のダイダ

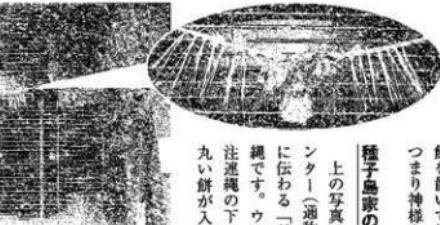
イは鶴の卵に見立てています。これは平家敗戦の際、

平家の子孫である種子島家の先祖(初代島主信基と思われる)が野宿をし、その頭上の松に鶴が果を作ったため、雨露をしのぎ快適に過ごせたことから作られる

際は、ダイダイが落ちる。実とがないよう、茅の蘆が受

1月1日の鉄砲船玄関で帰省客を迎えます

ます。



け皿の役割を果たします。正月に「落かる」ことを極端に嫌い、縁起を担いだことからきていると思われます。種子島では門松のことをカドキ(門木)といいます。地域によって使う材料や作り方など微妙に違いますが、門の両脇に立てます。一般的な門松に比べ非常に質素です。(一)三メートルの竹と松・ユズリハ・ウラジロを束ね、それを割った奇数のマテバサイの木で根元を固め、縄で縛ります。根元には浜でとった白砂を山盛りに積みます。これは海の清浄を表します。これらの準備を三十日か三十二日に満まセ、新しい年を迎えるのです。今ではほとんどどの家でしなくなっていますが、元旦早朝、家長である私の父は海岸へ潮井(海水)を汲みに行きます。誰にも会わないよう海岸へ行き、会っても話をしないようにして潮井を汲み、釜で家中の中や外に振り撒きます。初日の出を浴びた潮井で清め、新年を迎えるのです。

所変われば新年の迎え方も違いますが、新年がよい年になりますようにと願う人々の心は変わりません。



# 春を呼ぶ種子島の年中行事

古式ゆかしい 大的始式

「ヤフー！」といふ甲高い声と共に放たれた矢。

一月十一日、三ツ觸（種子島家家紋）の陣幕が張りめぐられた橋林神社の弓場で、松明が焚かれ、た嚴格な雰囲気の中、本瀬寺の鐘を合図に、鹿児島県指定無形民俗文化財である「大的始式」が執り行われます。その由来は、十二代島主種子島忠時（のちの弓の兄弟子）である武田筑後守光長が京都から來島し、宮中で毎年一月十二日に行われていた御的始式を文亀元年（一五〇一）より種子島家で行なうことになったとされます。

直径約一七五センチの大的を射ることで、悪魔災難を払い清め、島内の平安を祈る儀式です。またこの大的始の風にあたると、その年を健康に過ごせるとの言い伝えから、多くの家族連れが見物に訪れます。神主の祝詞や玉串奉奠などの神事のもと、一同は神社本殿から弓場に移ります。大的めがけて六人の射手がかかるがわる合計三六本の

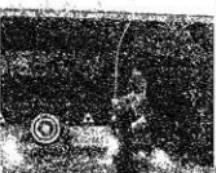
この大的始式に合わせて、種子島家の菩提寺である法華宗本源寺と日興寺には島内の僧が集まり、一日夕刻から十三日明け方まで陀羅尼を唱える。座柄がおこなわれます。「説みあかし」とも言います。

コノミヤジヨウをお祝い申す

オコナイの風景の中で餅花の写真を見たとき、この地域にも「コノミヤジヨウ（漢字では「蚕の宮城」）」があるのかなと思いました。（一月十四日あるいは十五日に種子島で行われるコノミヤジヨウ。蚕が盛んだった時代は蚕のまつりとして行われ、現在では小正月行事として葬ヶ所で続けれています。コヤスギの枝に切り餅を刺し、門木や部屋の四隅や柱に飾ります。切り餅を蚕にみたて、あるいは餅をさしたコヤスギの木がしなり、実った穂穂のように見えますことから、蚕作祈願の意味を表します。）

その晩は青年や子どもが集落の家々をまわり玄関先で「お祝い申す　お祝い申す　これから申すよ　門から申すよ　この家　家は祐福　まゆの家と見かけ申すよ　ましてこの家は祝うておじやる

松明が焚かれる弓場で、大的めがけて弓をかまえる



神主・島主など大勢が見守る中、島の安寧率が肅廟と執り行われる

矢を放ますが、三五本までがすべて命中した場合は、「満つれば欠くる」の戒めにより脚範役から三六本目に「はずまっしゃい」の声がかかり、最後の矢は故意にはずされます。故意にはずされた矢のことを「はずみ矢」といいますが、その昔、はずみ矢をした射手以外の射手は、島主より太刀や馬を賜っていたそうです。現在は金一封とのこと。



集落の家々の前でコノミヤジヨウの歌を歌う子どもたち

どうから　祝い申すよ…』とコノミヤジヨウの歌を歌い、家々から餅をもらいます。また、種子島の南にある南種子町のコノミヤジヨウでは、蚕舞（くわまい）という踊りが行われます。顔をむりで女装した青年が舞い手となり、餅花を持って舞います。また、ひよつとの面をかぶつた若舞が追化を演じ、周囲を笑わせます。そして来訪を受けた家庭から餅などをもらって帰ります。

これから季節、種子島では雪が降ることはなく、一足早い春の季節風が強く冷たい時期となります。それでも風のないよくなれた日は暖かく、やがて山桜や野の花が咲き、一足早い春が訪れます。小さな自然の変化と継承される年中行事を通じて、私たちちは春の訪れを感じることができます。

# 10 黒糖今昔物語

現在、種子島ではサトウキビ出荷の最盛期を迎えて、寒風の吹く中、サトウキビ農家は収穫に追われています。種子島では、サトウキビはさつまいもと並ぶ基幹作物の一つで、多くは初夏のころ植え付けを行い、冬に収穫を迎えます。台風の襲撃を受けるとすぐに倒れてしまいますが、次第に太陽に向かってまっすぐ伸びていき、ざわわざわわと、緑の葉が風に揺れるのです。

## 昔ながらのさとうめ

種子島の東海岸北部に位置する伊闇沖いあきなみヶ浜田集落たむらでは、漁船が始まるごとに、海辺近くにある砂糖小屋では集落の人たちが黒砂糖づくりを行っています。種子島では、サトウキビのことを「オーキ」と言い、黒砂糖を作ることを「さとうめ」、「オーキすめ」といいます。昔は集落ごとにさとうめを行っていたようですが、現在では沖ヶ浜田集落のみになっています。そこで、さとうめの方法をご紹介します。

てくれます。出来立てはほのかに温かく、ほどよい自然な甘さがなんとも言えません。

## 今も昔も黒砂糖

種子島で製糖が始まつたのは、文政十年（一八二七）、第一十三代島主久道正室・松寿院の功績により、薩摩藩から製糖の許可が出たことに始まります。島主はサトウキビの作付けを奨励しましたが、サトウキビを作つても、島主や藩主が潤つだけでは島民には恩恵がなかったことから、島民が大量に生産しようとすることはなかったとのこと。江戸時代、薩摩藩に大きな経済力をもたらした製糖事業ではありませんでしたが、種子島家は島津家と姻戚關係が多かつたことから、奄美大島のように厳しく管

混ぜ方には細心の注意を払っています

オーキの絞り汁を大鍋で煮て、つめていく作業

かもしません。

葉をとったサトウキビを、圧搾機にかけ絞ります。その絞り汁を大きな釜でゆっくり煮詰めていきます。不純物やアカを取り除くため、絞り汁に石灰水を混ぜながらゆっくりと搅拌し、オーキを絞る

圧搾機にかけ、オーキを絞る

絞り汁が茶色になるまで煮詰めています。温度調節や空気を入れるように搅拌するやり方は熟練者のワザです。この時、砂糖小屋の中は、立ち込める湯気と非常に甘い独特な香りに包まれます。その後、煮詰められた黒糖を型に流し込み固まるのを待ります。また、型に入れず、平たいところにそのまま流し置き冷やしたものを作ります。

砂糖小屋へ行くと、出来立ての黒砂糖を食べさせ

理されることはなかったようです。  
製糖事業は現在に至るまで、その時代の情勢によって盛衰を繰り返してきました。少し前までは、家族や結婚による作業で行っていた収穫も、多くが大型機械を用いるようになり、農業形態も様変わりしました。

太陽の光を浴びてミネラル分がたくさん含まれた黒砂糖は、鹿児島ではお茶受けの定番メニューです。黒砂糖はそのまま食べるだけでなく、炒めた落花生に溶かした黒砂糖をからめて作る豆菓子やふくれ菓子などお菓子に多用されます。また黒砂糖の粉を団子につけて食べたりします。鹿児島県が健脾王団なのは、この健康メニューのお陰

出早よがつた黒砂糖を温めな大ささに分け、冷やし固める

# 鐵砲伝来をめぐる人々

鐵砲伝来の地 種子島

「種子島」と聞いて、皆さんは一番始めに何を連想するでしょうか。「鐵砲伝来の地」を想像される方が多いのではないかでしょうか。

鐵砲伝来については、天文十二年（一五四三）種子島の門倉時充がボルトガル人から火縄銃二挺を譲り受け、それを模した国产銃が島の刀鍛冶の手

によつて製作され、その製作技術が國友や岸などに伝播し、急速に全国へ火縄銃が広まつたことが、諸説あります)定説となつています。

(時充は国产銃の製作を島の刀鍛冶・八板金兵衛清定に命じますが、どうしても自身の底を基<sup>シキ</sup>とする製法がわからず国产化は困難を極めています。そこで翌年、再来した中国船の乗組員であつた鐵砲鍛冶のボルトガル人にその製法を習つたことにより、国产化に成功しました。しかしその成功の裏には、八板金兵衛清定の娘である若狭の悲しい伝説が残っています。

## 若狭ものがたり

島主時充に火縄銃の製作を命じられた八板金兵衛でしたが、どうしても不<sup>シ</sup>の切り方がわからず、火縄銃製作は困難を極めていました。その技術を教えてもらう交換条件は、金兵衛の愛娘若狭がボルトガル人の妻になること。若狭は泣く泣くボルトガル人の妻になり異国へと旅立ちます。翌年、

種子島時充公像



若狭を乗せた中國船が種子島に立ち寄り、乗つていた鐵砲鍛冶のボルトガル人にネジの技術を教わり、國産火縄銃は完成します。若狭はそのまま島に残り、現在は小高い丘にある雲之城墓地に眠っています。

## 種子島にもあつた「三獻の茶」

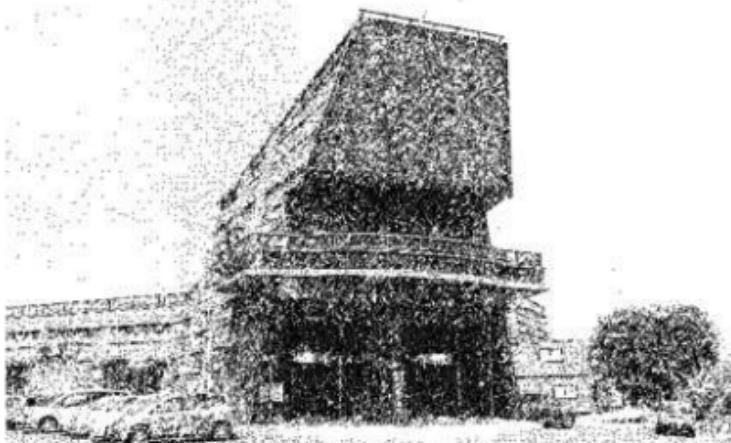
鐵砲伝來を取り巻く人々に、非常に聞わりのある「古田御前」という女性がいます。鐵砲伝來当時の十四代島主時充の側室であり、鐵砲伝來記す「鐵砲記」を南浦文之にまとめさせた第十六代島主久時<sup>ひさとき</sup>の生母です。時充と古田御前の出会いに次のような逸話が残されています。

時充が獣に出かけた際、のどが渴いたため、民家に入りお茶を求めました。ひとりの女性が茶碗を頭の蓋に載せて運んできました。初めは少し熱く、次にやや熱く、次にとても無いお茶を持ってきました。その女性がのちの古田御前であり、その賢明さに感動した時充は、古田御前を側室に迎えたということです。この逸話の真偽はわかりませんが、古田御前はわが子を立派な島主にするため、赤尾木城を離れ種子島で一番樂い古田に移

り住み、厳しく教育したということです。武勇に誉高い島主久時を育てた賢母として郷土の先人の人に数えられています。

種子島を故郷とするわたしたちにとっても、種子島は「鐵砲伝來の島」です。

それ故に長浜市と西之表市の交流は始まり、十一年以上の歳月の中で交流の絆を深めました。今後もこの交流は様々な方面で続き、そしてさらなる広がりを折りながら「種子島からめつかりもさん」を終了させていただきます。この一年間の掲載で少しでも種子島のことと共に興味を持っていただけたなら、嬉しい限りです。このような機会を与えてくださった皆様方に感謝申し上げます。



種子島開発総合センター（鉄砲館）



「種子島鉄砲まつり」で西之表市街を行く国友鉄砲研究会（平成19年8月19日）

II

「種子島からめつかりもーさん」に寄せて

種子島と長浜・国友と

種子島からタタラそして国友

中島誠一  
(長浜城歴史博物館館長)

昭和六十年度の特別展は、「国友鉄砲鍛冶—そ

の世界!」であつた。私と種子島の出会いもそこから始まる。諸説あるが、我が國への鉄砲の流入を考える際、最初に思い浮かぶのは、種子島であり、特別展示の筋道も白ずから決まった。ただし

鉄鍛治

都合、三回の渡島があつたが、やはり印象的なのは最初のお願いの時である。拝借と返しの際は資料が気になつて、見学者のゆとりなどまったくくなつた。ただひたすら重い火縄銃を一撃(麗児の川上さんからも重い火縄銃の際に使はれた火縄銃を押送した)ぶら下げる緊張しながら飛行機、船、電車と乗り継いだことしか記憶にはない。

さて種子島で貰い求めた銃は今もテスラに健在である。この銃は二つに分かれていないので結構式のプレゼントにもいいと聞き及び購入したが、飛行機、船、電車と乗り継いだことしか記憶にはない。

浜辺が真っ黒(砂鉄含有度が高い)の、その名も<sup>カキハシ</sup>鐵浜。キムタクが婚前旅行したサーフィンのメッカだそうな

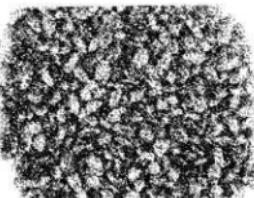
賢明な読者はすでに気づかれたことだろう。種子島と吉田村は、国友鉄を介在して深い関係があつたのである。種子島は受け入れられ、改良された火薬はこれまでの詐説があるが、近江での國友を伝来し、大量生産が可能となり、まさに國友の鐵を一変させたのである。その後國友に鉄砲鉄を供給したのは、吉田村（正しくは伊多郡上阿井の櫻井氏）であるが、これはを発見したのは島根に帰省妻の実家（安家）したときである。実は特別展開催に際しての大きな疑問は、一つには、なぜ國友で鉄砲生産がおこなわれるようにならなかつたのか（なぜ、國友でなければならなかつたのか）。もう一つは原料の鉄はどこから持つて來たのか（買いましたのか）であった。このことは特別展開録の中で詳述したのでご参照いただければと思ふ。南の島と中国山地の村を介在した國友鉄砲、まさに鉄の文化交流である。

「伝ボルトガル初伝統」が押借できるかどうかは

### 追憶

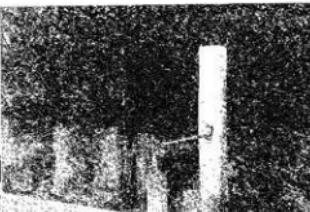
最初の渡島の際には、鉄砲資料館の駿島さんと親切にしていただき、いろいろな場所に連れて行ってもらつた。中でも門倉岬と宝満神社は印象的であった。前者はまさに怒濤荒れ狂う岬であり、私の服装ではボルトガル船が座礁していた。懸命に写真を撮り、解説図録に掲載し、後には国友鉄砲資料館のパネルにも使っていただいた。

宝満神社を訪ねたときは、打って変わってよい天気で、暑くて半袖が欲しいと思った。そして神



宝満神社の赤米

社の前の御神田には、赤い穂が揺れていた。今でこそ赤米は体験学習で使われるまでに普及してきただ。が、当時は民俗研究家にとつては赤飯の前身を具体的に示す資料として垂涎の的であつ



国友にあった鐵冶場

特別展の時作られた鐵冶場模式構成  
このあと国友鉄砲の歴史資料館で常設展示に移行

た。私も社前に入袋に入れて置いてある赤米を乗せ話をあげて持ち帰って蒸煮し、収蔵庫に今も保管している。もちろん、その後、体験学習や弥生時代の展示にも活用したことは言うまでもない。

そしてなんといつても焼鯛と魚、前者は三本買って帰り、魚はキビナゴがうまかった。伊勢工どなんかいらない。取り立ての新鮮な雑魚、二日と持たない新鮮な魚は、イワシもアジも漁れただがみなうまい。

### 後日談

島根からお借りした資料返却は悲惨であった。十二月末、中国道を走っていたら突然の大雪で路面はあつという間に真っ白の世界に早変わり、パンは立ち往生。雪だるまになりながら寝てテニードをつけ、国道に降りて宿にたどり着いた。今思えばよくぞ後方から追突されなかつたものである。だから宿での地酒伯耆富士は、生きている感謝の格別な味がした。

### 最後に

メフカリモーさんの思い出は、駿島さん、そし

て田上さん、おおらかな雰囲気とのんびりした語り口「ですよね！」の独特的の伸びが、実は九州佐世保出身の私にとってこの上なく安心・安全の人間関係なのである。

一年間島のいろんなお掘分けをいただいてありがとうございました。退職後、必ず行きます。

# 種子島の民話と刀鍛冶

森岡 菜一  
(長浜城歴史博物館蔵事)

はじめに

種子島は、『民俗の宝庫』といわれています。民俗芸能は百余種類もあり。民謡も百余種類にのぼり、昔話も三百余話が昭和三十七年(一九六二)までに記録されています。これらの昔話は、語り手の老人が父母や祖父母から口伝えて聞いて記憶していたもので、鹿児島や京都から伝わったものも少なくないと思われます。本土・鹿児島に近いながら、海が荒れると船も飛行機もすらも通えなくなる「孤島」であるからこそ、本上では失われた伝承や民話が伝えられてきたのです。

本稿では、種子島西之表市に伝えられた民話を考察し、そこで語られた薩摩の刀鍛冶について取り上げます。

## 一・民話「一平と貧乏神」

むかし、薩摩半島の喜入にぐんぐわら橋といふ橋がありました。橋は橋でも、こわれてしまつ

て、渡し舟で渡らなければ鹿児島へは出られないのでした。ところで喜入に一平という刀鍛冶がありました。この一平はいつもようけんめいに働くのですが、どうしたことか、いつも貧乏からぬけだせません。そして、どうにもこうにもならないままに、年の暮れになりました。先るもの

といつては、もう一ふりの刀しかありません。餅もつかず元旦をむかえた一平は、一日の初商いに刀を売ろうと思い、まだ暗いうちに起きて家を出、ぐんぐわら橋にさしかかりました。

一平がちょうど傍のたもとに来たとき、あとから駆け寄ってきて走ってくる者がいます。うす暗いなかではっきりとはわかりませんが、見なれぬ小僧がしゃんしゃんと大急ぎで走ってきます。一平は小僧を呼び止めて、たぬきました。

「おまやどけえ行くとか、朝はようからしゃんしゃん走つて。」

「おらあ喜入の刀鍛冶、一平の家におる貧乏神じや、一平のやつが、どうにもならんから刀を

亮るちゅうとつたから、急いでとめに行くところじゃ。あれが分限者になつたら、あの家へお

りやあならんからな、早まわりして行かんばならん」

と相手が一平とも気づかずに、しゃべるのです。

そこで一平はなげない顔で、

「なしかあそがんことを。一平はわざいよか人間じや」と聞いとるが、なしかあ貧乏せんばいんとか

とたずねました。貧乏神はしたり顔に、

「うん、そらあ一平はよか人間じや。じやがあの家のへ行

たて見れ、庭からどこから草ははうはう。となり

近所とのつきあいもせず、人間の住むような家じやな。女が笑い声で話すこともなし、よろう

て(一緒に)茶を飲むこともなし、取りきつて掃除をするでなし……、一平は働きもんでよか人間じやが、瘦貧のために貧乏すつとじや」と答ました。

「ははあ、そがんもんかな」

「一平は、心ではなるほどどうなずきながら、さりげなく小僧が渡し舟に乗るのを見すまして、

「しもうた、おらあ忘れもんをした。おまえはようさきい行たてくれえ」

といふなり、急いで家に引き返しました。

(中略) 大意

一平は室内と共に庭の草をすつかり抜き、笛笛や棚・道具の置き場所を替えて、ほこりをはらい、室内に理由を語りて、近所の人々を呼んでお茶をするよう命じてから、急いで出發したのです。

そこに小僧が帰ってきました。が、庭に立ち止まって、不思議そうにあたりを見まわしました。

「家はたしかにこの家じやが」

とつぶやきながら、家のなかをのぞきましたが、台所からにはぎやかな笑い声や話し声がしていました。

「やっぱり家をまちうたける、なかも別の家じや、それにわざい人がもようて(たいへん人が集まつて)笑うたりしとる」

と言いつて、大急ぎで出て行きました。一平のほうは、急いでおかげで、どうやら二日の市にま

にあいました。市の商人が、「おまえさんな、どういうふ(運)のよか人か、

年の晩に来れば十両にしか売れん刀が、きょうは三倍ものねだんで売る、ほんとうにふのよか人じや」

と三十両で買った上に、こちそうまでしてくれました。

一平は大喜びで喜入にもどり、刀鍛冶としてしだいに名が高くなりました。また、一平の家内も、それから愛想のよい働き者になつて、二人はいいくらしをしましたとさ。

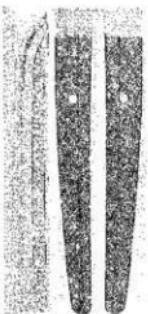
種子島の民話 第二集 (下野敏見編 一九六二年刊) より

## 二、刀鍛冶「一平」について

この民話は、主人(一平)の技術がいくら優れていても、家内が働き者で愛想よくなければ、家は繁榮しないという教訓話になっています。しかし、

この刀鍛冶「一平」は、実在の鍛冶なのです。

「一平」派の鍛冶は、中村一平安貞(一六五一~一七一七)を始祖としています。安貞は、中村清貞の三男で、薩摩國給婆郡喜入(鹿児島県)に生まれました。領主付久兼の命によって波平鍛治



〔新版 日本刀講座 第4巻  
所収 押形〕

五十七代大和守安行に入門し、波平・相州兩伝の技術を学んでいます。「一平」は安貞の通称名と考えられます。

その長男が、主馬首・一平安代(一六八〇~一七二八)です。享保六年(一七二二)幕府の命により出府し、御浜御殿で作刀しました。将軍徳川吉宗から、技術の優秀さを認められ、妻に一業の表紋を許されました。そして帰国途中の京都で「主馬首」に叙任します。これは江戸時代中期以後、停滞していた刀剣鍛冶を活性化しようという吉宗の政策で、安代は期待に応えて、相州伝の沸出來の豪壯な刀を鍛刀しています。表紋による愛称は、下坂唐経に據つたのですが、安代の場合は一代限りです。

なお子の安代が、父の通称一平を銘に刻んでいます。

種子島の民話に見える鍛冶一平は、一平派鍛冶のうち「主馬首・平安代」のことを伝えていると考えられます。薩摩藩で著名な刀工であった安代の話が、種子島に伝わったものと推定されます。主馬首・平安代は、「天雷一俊居士」と法名として喜入町の傑心寺に眠っています。

## むすびにかえて

種子島の民話に見える鍛冶一平は、一平派鍛冶のうち「主馬首・平安代」のことを伝えていると考えられます。薩摩藩で著名な刀工であった安代の話が、種子島に伝わったものと推定されます。主馬首・平安代は、「天雷一俊居士」と法名として喜入町の傑心寺に眠っています。

# 種子島への鉄砲伝来と国友鍛冶

太田 浩司

(長浜城歴史博物館蔵参考)

## 「鉄砲記」に見る鉄砲伝来

薩南学派の学船・南浦文之の文集「南浦文集」

に載る「鉄砲記」には、余りにも有名な大陸国種子島への鉄砲伝来の経緯を以下のように伝える。

天文十二年(一五四三)八月二十五日に、種子島西村(門倉岬)の小浦に大船が漂着した。赤尾木は百余人がいたが、その中に明の儒者五峰がいたので、西村の主宰機部丞は筆談して、自らの主君がいる赤尾木に船を曳航することを説き、さらに主君種子島時秀に連絡した。赤尾木には忠首座という文字をよく解する僧があり、五峰と筆談すると船には「牟良板金」と「利志多陀益太」という商人の長が二人いることを知られるが、彼らはその手に鉄砲を持つていた。時秀はその鉄砲に興味を持ち、九月九日をもってその発射実験を見学した。時秀はその威力に驚き、二人の商人から鉄砲二挺を貰い

この「鉄砲記」は、鉄砲伝来から六十年以上が経過した慶長十一年(一六〇六)に、種子島久時が、父時秀の功績を顕彰するため、南浦文之に依頼して作成したものである。中国船に乗った二人のボルトガル人により、日本で初めて鉄砲が伝えられたとする一説が含まれている。もちろん、江戸初期まで伝わった鉄砲伝来の伝承を、十分取り入れ編纂されたものだらうが、やはり伝承当時からは時間が経つており、必ずしも一等史料とは言えないと。しかし、日本における鉄砲伝來の経緯を記した唯一の書物として、その知名度はすこぶる高く、その記述内容は日本人の常識とまでなっている。

「國友鉄砲記」と鉄砲生産  
一方、近江国坂田郡国友(長浜市国友町)は、江戸時代に日本を代表する鉄砲生産地とえたことで有名である。当地での鉄砲生産の起源は、「國友鉄砲記」と題された文書に記される。現在、鉄砲鍛冶寄の一家「国友助太夫家」の伝来文書の中に原本が現存し、法量は縦二〇・四センチ、横二六・七センチで、長大な巻物状の形状をし、てある。ここでは、種子島への鉄砲伝来から、国友での鉄砲生産に至る記事が見ておこう。

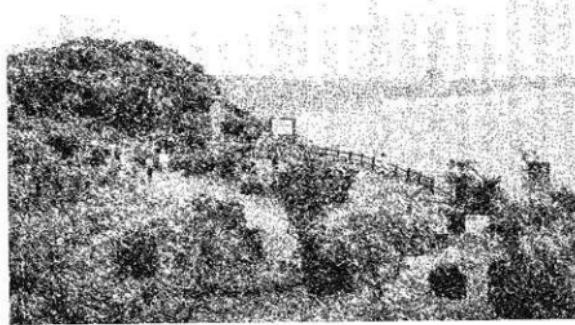
將軍足利義晴が同村の善光寺・藤九左衛門・兵衛四郎・助太夫らの鍛冶に、鉄砲一挺を見本として渡し製作を依頼したことから始まった。鍛治たちはネジ式の尾栓の製作方法に苦労したが、八月十二日に至つて玉目六丸の鉄砲一挺を完成させ将軍に献上し、その後数多くの鉄砲を献上した。

天文八年(一五三九)八月二十五日、南蛮國の大船が大陸國種子島に漂着した。島の当主の種子島時秀は、船に乗っていた「牟良板金」舍人から鉄砲一挺を譲り受け、一挺を薩摩國の島津義久に贈ったが、義久はこの鉄砲を同年十二月二日に將軍足利義晴に献上した。ほどなく、種子島では鍛冶の金兵衛清定が鉄砲製作法を習得して数千挺の鉄砲をつくり、九州から畿内、関東までも広まつていった。一方、近江の国友鍛冶の起源は、天文十三年(一五四四)二月に、

本書の成立は寛永十一年(一六三三)十月で、文書の奥には江戸時代に国友鉄砲鍛冶を統括した四人の年寄(大鍋善兵衛・富水德左衛門・中村兵四郎・脇助助太夫)の名前が列記されている。宇田川武久氏は、文中に元禄五年(一六三二)刊の「後太平記」の引用があることから、巻末に記された寛永十年の年号は借用できず、実際に編纂されたのは元禄以降であろうと推察する(同「真説 鉄砲伝來(平凡社新書)」)。その編纂意図は、国友での鉄砲生産の起源に、末尾に記された四軒の寄家が関わつたことを説明するにあつた。利潤をかしこ、山城一国の局港政権となつてゐた足利将軍家が、戦国大名浅井氏領内の国友村に鉄砲を発注することは、現実的には不可能である点など、

同書に記された国友鑄治の起源は、史実としては信用できるものではない。

ただ、本書が編纂された江戸初期の段階では、種子島家から島津家を経由して将軍に贈られた火



種子島鉄砲初伝地(門倉岬)

新宿柳橋界にみる新宿柳橋

繩銛が、種子島への鉄砲伝来の翌年・天文十三年(一五四四)、国友村の鍛冶へ兄本として渡され、それが「もと」となって鉄砲生産が始められたと信じられていることは重要であろう。種子島と中国が「鉄砲」で結ばれていること、江戸時代の国友鍛冶は考へておいたのである。

形で、戸十郎（若吉）が考證を記した内容である。最後に、附録として南浦文之による「族鑑記」を全文掲載している。戸十郎家は国友鐵砲政治の平定治の代、同家の担当した火薬庫も現存し、当宋（若吉）はその幕末の当主であった。

「国朝砲鎗撰興錄」にみる鉄砲初伝

『国朝砲鎗撰興錄』という木版刷りの書物がある。同友鉄砲鍛冶の一人、国友戸十郎当榮号を若指揮と言った)の著で、鉄砲や大砲が日本に渡ってきた経緯を考察したものである。書名の「撰興」とは、物事の始めの意味。安永二年(一八五五)仲秋(八月)に、江戸日本橋通二丁目の山城屋佐兵衛(玉山堂)から木版刷りで刊行した表裏共三十九丁の書子である。木下久義が貞享元年(一六八四)に著した兵法書「武用辨略」の中から、「火矢」と「鉄砲」の項を引用し、それに二行の割注で

ここで、「鉄砲」の項を紹介しよう。戸十郎は文亀（一五〇一～〇四・大永（一五六一～二八）年間からの鉄砲伝来を木下が説くのに対して、「鉄砲ノ我が三伝り始メタル因來ハ、色々ノ説アレドモ、皆信ジカタシ、只南浦文集ニ天文、翌明成、萬葉ノ國ノ稚子・南安、大船泊ノ傳來也。」とある。鉄砲ヲ弓ヘ教タルト云ハ、正説ニシテ」とある。すなわち、種子島以前の鉄砲伝來説を否定、文亀・大永年間から日本に鉄砲が伝來していたといふ記述は「妄説」だと断定する。このように戸十郎の記述は、諸書を学び考察を重ねた結果であり、きわめて論理的である。さらに、「鉄砲記」の引用に当たっては、原本が漢字のみで「初学童蒙」にはわからぬくらいので、「和字ノ解釈ヲ加テ」の解説を掲載するとしている。この言葉が象徴するように、本書はほぼ全文に擬似仮名が施され、書き下し文による平易な文章で記されている。

鉄砲伝来をめぐる新説

この植物により、江戸中野に至つても國友鑑定たちが、日本での火縄銃の起源が種子島への伝来にあると考へていたことが知られる。南浦文之の「鉄砲記」を金科玉采とし、そこに記された以前の日本への鉄砲伝来を強く否定する。

椎葉録<sup>1</sup>などを紹介し、従来から言われてきた江戸時代に鉄砲初伝地を種子島とすることは共通しているが、江戸時代に入つて遷及的に記されたもので、記述内容については信憑性に欠けることを先に指摘した。

さらに、最近になつて日本への鉄砲伝来は種々島のみからではなく、西日本全域に分散的・波状的に伝来となるやうである。田川武久氏の説が発表された問題となつてゐる(同「異説 鉄砲伝来」など)。字田川氏は日本への国外からの伝来説に近い「南蛮簡」「異風箇」と呼ばれる鏡が、ヨーロッパの火薬銃ではなく、東南アジアの火薬銃に近似している事実を上げ、日本への鉄砲伝来は直接ヨー

ローバからではなく、東南アジアを経由している

ことを明らかにされた。その上で、当時東アジアで活躍していた倭寇が、東南アジアの火縄銃を日本へ伝えたと結論したのである。

したがって、鉄砲伝来の年は天文十二年のみではなく、場所も種子島のみに伝わった訳でないと述べられる。鉄砲伝来は一度きり、特定な場所へのみ行われたのではなく、繰り返し場所を要えて伝來した鉄砲が、徐々に日本列島の西から東へ向かって広がつていったと考えたのである。そもそも、四周を海に囲まれた日本で、海外からのある物資がある一回だけ、一ヶ所にのみ伝來したと考えるには無理がある。

### 種子島は鉄砲の代名詞

一方、日本の江戸時代、火縄銃のことを「種子島」と呼んだ事実がある。この事実が、火縄銃の初伝地は種子島であるという観念が、日本人には早くから根付いていたことがわかる。同じく、国友鎌治も日本における鉄砲伝来の起源は、種子島への鉄砲伝来であると考えていたことは、先に見た「國友鉄砲記」や「國朝鉄炮傳錄」から明白

である。

宮町幕府第十二代将軍の足利義晴の管領であつた細川晴元は、本願寺に對して「奔走頂いたおかげで種子島より鉄砲がこの方に到來した。誠に悦ばしい」と記した書状を送っている（宇田川武久『鐵砲と戰国合戦』）。

この書状からは、鉄砲が未だ珍品で贈答品に使用されたことが知られるが、鉄砲が種子島から贈られてきたと記していることが重要だろう。本書は天文十八年（一五四九）のものと推定されているが、すでに宮町幕府内において、種子島が日本における鉄砲生産・活用の先進地として意識されていた事実を読み取ることができる。

鉄砲の日本への伝来は、分散的・波状的であったとしても、天文十二年に種子島へ鉄砲が伝来した事実は、伝来當時から種子島氏や島津氏によつて傭兵され、鉄砲伝来地と言えれば種子島といふ常識が日本社会に植え付けられていったと考えられる。

実は、国友への鉄砲伝来についても、明確な時期はわからない。現在分かっているの国友鉄砲の初見は、越前の朝倉氏の一門と推測される一源軒

宗秀が、出羽の武将下国氏に宛てた書状に、

答品として「國友丸筒」と見える書状である（宇田川武久「新説 鉄砲伝来」など）。本書状は天文末年か永禄初年のものと考えられ、戦国大名浅井氏の治世下であることは間違いないが、それ以前の起源を物語る史料はない。後世、国友鎌治の経営が軌道に乗つてくると、その起源を明確にする必要が生まれ、種子島への鉄砲伝来の翌年、国友へ鉄砲生産が命じられたとする先の「國友鉄砲記」の説明が生まれた。

### 鉄砲初伝地・種子島は「史実」

結論から言えれば、種子島への鉄砲伝来は、日本への鉄砲伝来を象徴する出来事として、種子島家や島津家などによって象徴的に語られた「逸話」なのである。しかし、それは単なる「逸話」ではなく、「眞実」を象徴的に示した「逸話」と言える。倭寇が複数回にわたり日本へ鉄砲を伝えたことも「眞実」だろうが、それは記録には残らない。残らなければ、証明し得ないので「史実」とは言えない。種子島への鉄砲伝来は「逸話」である。「眞実」に基づいて作られた以上、それは

砲初伝地なのである。

日本へ鉄砲を伝えたのは、日本のことここに至つた倭寇が先か、種子島に漂着したボルトガル人が先かは、今となつては分からぬ。わからない以上、記録に残つた種子島こそが、日本における鉄

「史実」と認識できるだろう。

それにも増して、種子島が日本への鉄砲伝来の地だと、江戸時代以来、国友鎌治はじめ日本人が考へてきた事実には歴史的に重みがある。種子島は、日本への鉄砲伝来を象徴する場所として、伝来当初から考へられて来たのである。したがつて、種子島への鉄砲伝来は、日本の歴史上の「史実」として否定されるものではない。つまり、倭寇による鉄砲伝来と、種子島への鉄砲伝来は、すべての歴史事象が記録として残らない以上、矛盾するものではない。両者は「眞実」の両面を説いてい

# 関西人の種子島感

北村大輔



長浜城で展示説明をする田上さん

長浜城歴史博物館に来館されたあるお客様に田上さんのことをこう紹介した。「長浜市と友好都市である種子島の西之表市から派遣交流職員として一年間長浜市で勤務いただいている田上美子です。」するとお客様は「以前は西表（いりおもて）」つて言っていたのにいつから西之表に変わったの?」と田上さんに聞く。田上さんはガッカリという表情を押し殺しながら、「西表（いりおもて）は沖縄県です。西之表は鹿児島県ですよ。」とやさしく説明していた。内心は、「なんぞ聞違うの! あり得ない!」くらいのことを思っているだろうに。

どうも私を含め関西地方の人間は、種子島ははるか遠い南方の島というイメージがあり、かつて「西之表」という字面から、あのヤマネコで有名な沖縄県八重山列島の西表島と混同している傾向にあるようだ。実際には、種子島は7世紀後半から当時の大和王権と交流を持ち始めているのであるから、もうかれこれ一二〇〇年以上のお付き

合いになる。そろそろ鹿児島県大隅半島のすぐ南に位置していることに気付かなければならないだろう。

ということで、種子島との交流序史を少し紐解いてみよう。当時の大和王権は天武天皇六年（六七七）の二月に、多福鷦（種子島）からやつて来た使者たちを飛鳥寺の西の楓（ケヤキのこと）の下で要応している。当時、飛鳥寺の西には楓の大木があり、その下の広場は国家的重事において度々登場する。この場所は古代の人々にとって特別な意味のある土地であったようである。

この多福鷦からの使節団の来朝を受けて、大和王権側も天武天皇八年（六七九）、倭馬糸部造（倭馬糸部造）連らを使者として多福鷦に派遣している。さらに天武天皇十年（六八一）には、多福國から帰つて来た使者が、多福國の地図を持ち帰り、その上で多福國の風土などを報告した。この報告によると、筑紫（九州）の南の海上にある多福鷦の人たちは、髪の毛を短く切り、草の蓑を着正在してい

るという。稀は常に巻に笑り、一度植えれば、年に二度収穫することが出来る。産物はクチナシやイグサ、種々の海産物であるという。温暖な気候に自然の恵み豊かな土地柄は昔も今も変わりない。このような大和王権と多福鷦との相互理解・相互交流は発展し、八世紀の初頭には、多福鷦は大和王権の中に組み込まれていくことになる。

当時のヤマトの人たちが多福鷦のことを深く知つて以来一二〇〇有余年、現代の多福鷦の使者「田上美子」は、長浜で何を見聞き、何を西之表市にもたらすのだろうか? 長浜城歴史博物館は、現代の楓の木の下の広場であったのであろうか? こんなことを心配しながら、今後、田上さんを介した西之表市と長浜市との交流が益々発展することを祈りたい。

# 南島文化と民俗学

橋本 章

名もらぬ 遠き島より

流れ寄る 柳子の実一つ

故郷の岸を 跳れて

波に幾月

法はそも 波に幾月

これは有名な唱歌「柳子の実」の歌詞の一節である。

作詞は島崎藤村（一八七二—一九四三）。

藤村は親友の柳田國男（一八七五—一九六二）から、愛知県渥美半島の先端にある伊良湖岬でYSISの実が流れ着いていた様子の話を聞き、この詩を詠む着想を得たのだという。その後、昭和十一年（一九三六）になって、この詩には作曲家大中寅二によって曲がつけられ、七月には東洋林太郎が歌いラジオで放送され、その年の十二月にはレコードに吹き込まれ人気を博した。

さて、柳田が伊良湖岬に滞在したのは、彼が東京帝國大学の二年であった明治三十一年（一八九八）の夏のことである。この時に柳田は、伊良湖岬の恋路ヶ浜を散策中に漂着したヤシの実

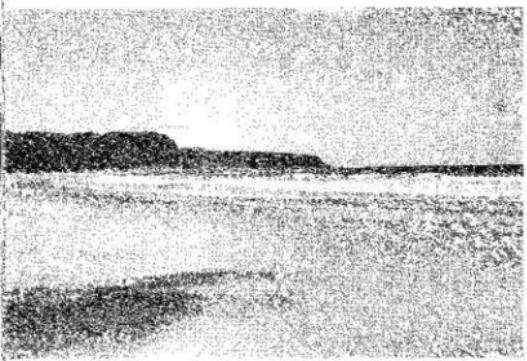
を呼び、日本文化の源泉を求める南島文化への憧憬の念を日本人の心に芽生えさせたのである。

しかし現在、柳田の論は必ずしも定説とはなり得ていない。それは、ひとつには「海上の道」が

執筆されたのが、日本が第二次世界大戦の敗戦後であつたことと無関係ではない。戦後、南西諸島は大半が日本から切り離され米国の統治下に置かれていた。奄美群島や沖縄は日本ではなかつたのである。柳田國男が「海上の道」に込めたものは、日本列島の文化が、はるか南の島々から黒潮によつてもたらされたものであり、本土と南西諸島とは等しい文化で結ばれた同體なのだという、強烈なメッセージであった。それは時代の産物であり、必ずしも學問的な裏付けを伴わないものであつた。しかし、當時の人々は柳田の言説に感銘を受け、本土復帰は国民共通の大願となつたのである。

唱歌「柳子の実」の最後には、次のような空寂の詩が詠われる。

悪いやる 八重の汐々  
いざれの日にか 国に帰らん



## 編集後記

私自身も専朝、通勤のたびに「種子島の紫イモ」という看板を見るたびにモーさんの表情を思い出してしまって。まだモーさんの思い出が私たちの周りには満載です。

この小説は、私たちがモーさんとお付き合いした一年間の思い出や島に寄せる思い、彼女にかける期待などをそれぞれに綴ったものです。

「こんな違う！」と思うかもしれません、どうかその思いをみ取っていただければ幸いです。

（中島誠一）

縁あって、田上美子さんと一緒に仕事をさせていただきました。田上さんが、長浜城歴史博物館の勤務を希望し、私たちといっしょに仕事ができたことに感謝する意味で本書を企画しました。後半の文章は、長浜城歴史博物館の職員一人ひとりが、田上さんと共に過ごした一年間を思い出しながら書いたものです。田上さんが長浜市で活動したこととは、単なる職員同志の交流にとどまるものではありません。西之表市と長浜市で行われている人事交流が両市の文化交流になっていることを、市民のみなさんに知つてもらえば幸いです。

（山口優子）

## 種子島からめっかりもーさん 種子島の歴史と民俗

2010年3月31日 初版1刷発行

編 集／長浜市長浜城歴史博物館

企画・発行／長浜市長浜城歴史博物館

滋賀県長浜市公園町10-10

TEL. 0749-63-4611 FAX 526-0065

印 刷／サンライズ出版株式会社



1 植子島って？



2 米のチカラ



3 皆既日食—「月に一番近い島」・種子島



4 八月の種子島



5 山の井様と松寿院



6 さつまいも（甘藷）にまつわるお話



7 芸能の島と額成就

8 来年もよい年でありますように

9 春を呼ぶ種子島の年中行事

10 黒糖今昔物語

11 鉄路伝来をめぐる人々

